

比較して論ずる譯には行かないが、それでも政黨としての専制を行つてゐるといふ意味に於ては、同じく政治なるもの、根本的欲陷を暴露してゐるものである。

レニンは『國家と革命』の中で言つてゐる。『無産者階級は強力に依つて集權的に組織された國家を必要とする。それは被取者（資本家）の抵抗するのを打ち破る爲めと、民衆の大部分……即ち百姓や下層の中流階級や半無産者階級……を、經濟上の社會主義的改造の事業に導く爲めとである。』と。（英譯、三十頁。）また、『被取されてゐる階級は、すべての被取を完全に廢止する爲めに、即ち近代の奴隸所有者……地主と資本家……より成り立つほんの少數者に對して、民衆の大多數の利益の爲めに、政治上の至上權を必要とする。』と。（同書、二九頁。）斯く見るところから、レニンはプロレタリアの獨裁政治を主張するのである。そしてそれはマルクスの教へてゐる革命遂行の法式なのである。レニンは他く迄もマルクスの教へてゐるところに忠實ならんとするに外ならない。然し吾々は如何にマルクスが教へてゐるところであるからとて、プロレタリアの獨裁政治の主張に對しては、多くの不信と疑惑とを持たずにはゐられない。吾々はマルクスを偶像にすることを好まない。

レニンは更に言ふ。『共產黨宣言に於て、歴史の一般的教訓が示されてゐる。それは國家が階級支配

の機關であることを吾々に知らしめ、且つ無産者階級は、先づ第一歩として、政治力を勝ち得ずしては、政治上の至上權を獲得せずしては、國家を變じて『無産者階級が支配階級として組織された』ものにせしめずしては、資本家階級を倒すことの出来るものでないといふ必然的な結論へと吾々を連れて行くのである。何故なれば、階級的敵對のない社會に於ては、國家は不必要であり、不可能であるからである。』と。（同書、三三頁。）これはマルクスやエンゲルスの説いてゐるところをレニンが盲信してゐることを示すものであつて、プロレタリアの獨裁政治を経なくては、新社會に至ることの出来るものでないと主張するのには、吾々としては同感することは出来ない。さうした階段を経なくてはならぬものであらうか。吾々から見れば、エンゲルスやレニンのいふプロレタリアの半國家と稱するものは、そんなに容易く消滅し行くべきものであらうとは思はれない。權力の集中された社會は、純然たる國家に外ならなく、其處では黨派間の政權の奪ひ合ひが、やはりブルジョア國家と同じやうに行はれて行くであらう。そしてマルキシズムは國家社會主義に外ならないことを示すであらう。

ソレルは既にそのことを言つてゐた。即ち、『……無産者階級の獨裁政治は、そのうちに段々弱まつて、消滅し行き、遂には無支配の社會がそれに取つて代るやうになるのであると言はれてゐる。然